

社会学と哲学

——パースペクティブとディシプリンを考えるために——

神戸学院大学
岡崎宏樹

1. 本報告の目的

本報告の目的は、社会学のパースペクティブとディシプリンの形成において哲学との対話がきわめて重要であることをデュルケームの批判的読解を通じて論じることにある。

社会学は、学問領域の拡大と細分化によって発展してきた。だが、はたして社会形成の基礎を解明する探求する方向に深化したといえるだろうか。なるほど現代の社会学は、デュルケームの時代には想像もしなかった新しい事例を考察し、『自殺論』(1897年)の水準とは比較にならないほど精緻な調査・統計の手法で研究を進めている。事例の現代性と実証的手法の精緻さという点でいえば、いまさらデュルケームを読む意義はないように思える。

けれども、現代の社会学が、相変わらず、個人—社会の区別、主観—客観の区別を前提に議論しているのだとすれば、パースペクティブという点では『社会学的方法の規準』(1895年)からどれだけ前に進んだといえるのだろうか。社会学のパースペクティブを問い直すためには、社会学的思考の〈外〉もしくは〈闕〉に立つ必要がある。デュルケームは哲学的思考に向き合うことで、社会学の境界を繰り返し確認し、パースペクティブの固有性を見出そうとしていた。そのことは最晩年の講義の主題が「プラグマティズムと社会学」であったことにも示されている。

だが、『宗教生活の基本形態』(1912年)の鍵となる「集合的沸騰」という概念を語り始めたとき、デュルケームはみずから前提としてきた「個人意識」と「集合意識」の区別がもはや困難になるような根源的次元に直面していたように思われる。

2. 存在論的パースペクティブ——「沸騰」の理解のために

「集合的沸騰」は『宗教生活の基本形態』における最重要概念のひとつである。辞書的にいえば、「沸騰」は「内部から気化が生じる現象」を意味する。それは形あるものと無定形なものの境界状態である。だとすれば、「集合的沸騰」もまた個人や社会のかたちが失われる限界状態を指し示すと考えてよい。無定形で非分節化した「沸騰」から個人と社会のかたちや宗教的観念が形成されるのである。

ところで、「沸騰」は集合的な場で生起するのであるから、これを「集合意識」の水準における体験と理解してよいだろうか。否、「このような高揚状態」に達したら「人間は自分がわからなくなる(我を忘れる)」という点に関していえば、これは「集合意識」ではなく、「非知」の体験ととらえるべきであろう。「沸騰そのもの」は人間の二元性(個人意識/集合意識)の境界(隙間)の現象・体験なのである。

この非分節的な現象・体験の位置は存在論的なパースペクティブによって明確になる。例えば、バタイユの理論であれば「連続性」、レヴィナスの理論であれば「イリア」、ラカンの理論であれば「現実界」といった概念を使って説明することができる。一方、「個人意識」と「集合意識」の二元性に基づくデュルケームの枠組みでは、こうした無境界の現象・体験を理論的に位置づけることができない。それゆえ、「沸騰」を原理的に考察するためには、存在論的なパースペクティブを社会学的思考に導入する必要がある。

「沸騰」に向き合うなかでデュルケームが実証主義の限界に達していたことは方法論という点からも確認できる。『社会学的方法の規準』の有名な定式によれば、「第一の基本的な規準」は「社会的諸事実を物のように考察すること」である。「社会諸現象」は、「これを表象する意識主体から切り離し」、「外在する事物であるかのように、外部から研究されなければならない」。しか

し、無定形で非分節化した「沸騰」を「物として」「外側から」把握することは不可能である。

デュルケームの記述方法を精査しよう。アボリジニの儀礼を記述する際に、デュルケームは Howitt や Spencer&Gillen のモノグラフを資料に用いるのだが、「沸騰」の事例として参照する資料には「沸騰」の語は見あたらず、儀礼参加者の体験や情動を内側から記述している箇所も存在しない。つまりデュルケームは原資料を再構成し、主体の感情や内的経験をみずからの言葉で記述し、自分の理論枠組みによってこれを分析・解釈しているのである。この場合、デュルケームが読者の実感に訴えるかたちで内的経験の記述をおこなっている点に注目しよう。「このような高揚状態に達したら、人 (l'homme) はもはや自分がわからなくなる、ということを我々 (on) は容易に理解する」とデュルケームは記す。彼がここで求めているのは、「人」(他者)の経験を「我々」(研究者・読者)が内側から共感的に理解することなのである。「沸騰」はそれを把握する主体の内的沸騰と呼応してはじめて理解される。そして、その理論的な位置は存在論的パースペクティブの導入によってより明確になる。

3. 複数のパースペクティブの〈あいだ〉

ところで、存在論的パースペクティブから思考を展開するのは哲学の役目であって、社会学の仕事ではないと主張する人がいるかもしれない。哲学的パースペクティブの導入は社会学のディシプリンを揺るがしかねないとの危惧をいただく人がいるかもしれない。

この点に関しては、「プラグマティズムと社会学」でデュルケームが論じた「真理」の議論をふまえ、複数の思考の〈あいだ〉で探求し続けることの意義を強調したい。このソルボンヌでの講義(1913-14年)でデュルケームは、汲み尽くせないほど無限に多様な「現実(リアルなもの)」を、有限な個人が全精神を投企し探求することを通じて「部分的真理」が発見されるのだと述べている。「それぞれの認識対象には、いずれも十分に根拠のある、さまざまな見方が存在することになる。これらはおそらく部分的真理にすぎない」。だが、「部分的真理」どうしを対話させるならば、「非人格的な真理」をめざすことができる。また、「生成」それ自体は思考できないが、「生成」と「現実化したもの」の「関係」は思考可能である [Durkheim 1955]。

だとすれば、社会学的思考においてパースペクティブが一つである必要はなく、むしろ複数のパースペクティブの「関係」のなかで考えることが重要なのではないか。存在論的パースペクティブは、経験の全体を分割できない持続として理解する「生成の論理」を展開する。実証主義的パースペクティブは、経験を諸部分に分割し、それらを実体として定着して理解する「定着の論理」を展開する。私たちは、それぞれによって発見された「部分的真理」を重ねて検討することで探究をさらに前に進めることができる。

『宗教生活の基本形態』を刊行する前年、ジョルジュ・ダヴィ宛書簡のなかで、デュルケームは「私は哲学から出発して、そこに戻ろうとしているのだ」と書いている。もし現代の社会学が、パースペクティブの硬直化とディシプリンの拡散化の問題に直面しているのだとすれば、私たちがまた原点である哲学的思考に立ち戻りつつ、複数の思考の〈あいだ〉で考え、パースペクティブとディシプリンを再構成し続けてゆく必要があるのではないだろうか。

【文献】

Durkheim, Émile, 1895 [2002], *Les règles de la méthode sociologique*, P.U.F.=1978, 宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店。

———, 1912 [1990], *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, P.U.F.=2014, 『宗教生活の基本形態』山崎亮訳, 筑摩書房。

———, 1955, *Pragmatisme et sociologie. Cours inédit prononcé à La Sorbonne en 1913-1914 et restitué par Armand Cuvillier d'après, J. Vrin.*

作田啓一, 1993, 『生成の社会学をめざして——価値観と性格』有斐閣。